

群馬県前橋市の中央を川が流れている。仙台の川の名と同じ広瀬川である。川の畔は市民憩いの場所でも人が良く散策している。前橋の生んだ詩人荻原朔太郎の生家もこの近くにあって私は埼玉県に住み三十数年、前橋の街には余り馴染みがなかった。群馬県を舞台にした小説を二編執筆したことが縁となり、シンポジウムのパネラーに駆り出されたり、講演を依頼されたり、群馬テレビから取材を受け講演の映像が翌日のニュース番組で放映され、「今話題の人」生番組出演を更に要請され一ヶ月後に同舎に向いたりした。そうした機会がもし無かったならばこの川の名も知らず、川の畔の小さな私設の美術館の存在すら知らなかったであろう。

昭和四十年始めて就職した場所は高崎である。岩鼻町の社宅に住んでいた。休日に買物や映画を観に出掛けた高崎には土地勘がある。時々車で前橋にも出掛けることもあったが、広瀬川の名は全く知らずにいた。岩鼻の鬱蒼たる森の奥広大な敷地に昔陸軍の火薬庫があったが、現在三分割するようにその森を切り開き「群馬の森公園」と「日本原子力高崎研究所」、私の勤めた「日本化薬高崎工場」が存在している。工場は昔岩鼻作業所といって火薬を製造し、後に医薬品製造の工場に転換し今日に至っている。社宅のあった場所に「赤城の山も今宵限り」と芝居や映画で描かれた侠客国定忠治が襲つたとされる岩鼻代官所があったらしい。石段を登ると社があり、毎年元旦にそこで社宅の人々が新年の挨拶を交わすのが慣わしである。忠治は妾と共に隣地の玉村に住んでいたと聞く。

広瀬川美術館は心象の画家故近藤嘉男の自宅

兼アトリエとして広瀬川の畔（現前橋市千代田町）敗戦後間もなく昭和二十三年に建設された。子供の絵画教室「ラボンヌ」や彫刻教室「生活造形実験室」を開設し人々に芸術を広める運動を展開する。大きな格子窓から燦々と降り注ぐ緑と光りを豊富に取り込み、戦禍を受けた前橋市民に希望と勇気を与えてきた。戦後の建築物として日本で最初の国登録有形文化財として登録されたのも頷ける。平成九年に美術館に改め、平成二十年に改築し多目的ホールや喫茶コーナーを各種の小イベント開催する広瀬川美術館として生まれ変わった。文化人が気軽に立寄ること知られる。月曜日が休館日で入場料は五百円。

2004年県内でロケをし、ドキュメンタリー映画「蚕その不思議その恵の家蚕と山の蚕」を製作した櫻井監督が自身の映像展「櫻井頭と仲間展」を開いた。読売新聞が一月二十五日の群馬版で『絹の町、絶やすな』の見出し付きで報じた。国内の絹需要の低迷で国内の製糸工場は二社のみとなった。県内では安中の碓井製糸農業協同組合だけである。櫻井監督は自身が育つたというだけでなく上毛カルタに「県都前橋生糸の市」と詠まれ、「日本の近代化を支え世界をリードした県内養蚕業の火を消すわけにいかない」と事あることに熱っぽく語り自ら行動してきた映画監督である。日本初の富岡の官営製糸場は世界遺産候補になって観光客を集めているが、それも明治三年前橋藩が機械式製糸工場を日本で始めたことに端を発していることを前橋市民ですら知る者は少ない。展示でも前橋の過去の実績と栄光を忘れるなど警告を発している。仲間講演者は数名で、賛同の私も『奇妙な羽衣伝説』で養蚕業の凋落を描いたこともあり「今話題の本と群馬のシルク」と題して講演要請された。読売の告知報道があつたにも関わ

らず櫻井監督の撮った映画を美術館に観にきた人々は少なかつた。私の講演は、一月十八日と二月二十一日の計二回。話題の本とは富岡七日市藩を描いた『七日市藩和蘭薬記』である。

本は県内で意外と売れ行き良く、マスコミは読売新聞が拙著を取上げたのを皮切りに、地元上毛新聞が書評と記事で二回、群馬テレビが初回講演時の模様を取材放映、二回目も二人の男女アナのQ&Aに心えるトーク番組「ピクアツブぐんま」という生番組に「今話題の人」として出演機会を得た。最近自治体関連の人々が本を読んでいることを知り、女性アナの最後のQ「この本で群馬県の人々にどんなところを感じて欲しいか・・・」A「土地の基盤や精神風土が軟弱でも、その土地に住む人にとつての舞台であること、地方自治や地域経営も主人公宮脇一之丞の生き方を例に幕藩時代の歴史を学ぶことでその閉鎖性に活路が開けるのではないかと、七十分の緊張した時間帯を締め括った。

放映後、面談取締役執行役員からお褒めの言葉を戴いたのみならず、埼玉で三月二十八日実施の初の朗読コラボ「優しいピアノに包まれて」：「シャノンと朗読のコラボ」(於カフキヤラリー・サイン 0488888-1045)を、テレビ埼玉報道制作局長に紹介の労を執ってくれたのである。広瀬川美術館の二回目の講演は、前日群馬で雪が舞つたが一転当初春の陽光に恵まれた。司会役の櫻井監督、美術館オーナーや館長、高野長英を匿った中之条名家のご子孫、元工業試験場場長、読売新聞社藤岡支局長、PEPO副センター長、鬼石の従兄妹夫婦、マスコミ告知による読者参加の温かい視線にも囲まれ、美術館の部屋が一級の地元文化人の集いとなった。講演後和気藹々の雰囲気の内、意見交換が行われ演者の私も久々に充実感を味わった。了